草木育種

六



草木育種巻之下目録

國字分類

以 稲 五ヲ　芋 九ヲ　いんぎんさゝげ 十三ヲ
　 硯松 四十ウ　無花果 十八ヲ
波 蓮 十二ヲ　胡枝子花 四十三ヲ　一船蜞 四十五ウ
　 薄荷 廿八ヲ　望江南 廿八ウ　ぢゝら 卅九ヲ
仁 韮 八ヲ　人参 廿一ヲ　日〻さう 四十四ヲ
保 菠薐 七ウ　防風 廿四ヲ　牡丹 廿二ウ
　 酸漿 廿八ヲ　木瓜 卅二ウ
邊 絲瓜 十四ウ　紅花 卅五ヲ

土　冬瓜　十四ヲ　番南瓜　十四ヲ　番椒　八漂注
玉蜀黍　二十ウ　燈心草　卅四ウ　當歸　廿四ヲ
木賊　廿九ウ　兎絲子　廿九ウ　玉蘂花　四十ヲ
遲　茶　十八ウ　甘露兒　十一ウ　馬鈴薯　十ヲ
地黄　廿六ヲ
利　龍膽　廿五ウ　林檎　十六ウ
遠　敗醬　四十二ウ　万年青　四十六ヲ　とにしだ　四十七ヲ
和　草綿　卅四ヲ　わさび　八ヲ　黄連　廿三ウ
加　蕪菁　七ヲ　芥　七ウ　黄獨　九ウ
冬葵　八ヲ　甘草　廿二ヲ　莪求　廿四ウ

烏頭　卅一ヲ　燕子花　四十三ヲ　萍蓬草　廿九ウ
柄　十七ヲ　海紅　卅六ウ　槭樹　五十ヲ
與　薏苡仁　六ヲ
多　大豆　六ヲ　蘿蔔　七ヲ　著蓬菜　七ウ
蓼　八漂注　淡芭菰　二十ウ　蘭蕉　四十四ヲ
澤瀉　廿九ウ　百兩金　四十七ヲ
祂　連翹　卅一ウ
曾　蠶豆　十三ウ　蕎麥　六ウ　火蕉　四十八ウ
津　佛掌薯　九ウ　躑躅　卅七ヲ　山茶　卅七ウ
称　葱　八ウ

奈 荄 七ヲ　茄 十ウ　刀豆 十三ウ
　瞿麥 四十三ヲ　梨 十六ヲ　南燭 廿九ウ
良 幽蘭 四十四ウ　落花生 二十ヲ
武 麥 五ウ　紫草 廿五ヲ　梭 十五ウ
宇 うぜ 八ウ　鬱金 廿五ヲ
為 見以 於 見遠
久 慈姑 十二ウ　烏芋 十二ウ　高良薑 廿五ウ
　栗 十六ヲ　香橙 十七ウ　桑 廿三ヲ
　枹杞 廿二ヲ　山梔子 廿一ウ
也 高陸 廿六ウ　紫金牛 四十八ウ　箭竹 廿四ヲ

楊梅 十八ヲ
末 甜瓜 十九ヲ　醬瓜 十三ウ　鹹蓬 十二ヲ
　硃砂根 四十ウ　竹蘭 四十六ウ　江南竹 十四ヲ
　苦竹 十四ウ　松 廿三ウ　楤椏 十七ヲ
　蔓荊子 廿一ウ　茉莉 廿七ウ　玫瑰 廿八ウ
計 罌子粟 六ウ
不 款冬 八ウ　匏 廿五ヲ　獻歲菊 四十ヲ
　風蘭 四十一ウ　葡萄 十九ヲ　紫藤 四十ヲ
　木芙蓉 廿六ウ　扶桑 廿七ヲ
古 胡麻 六ヲ　葯蒟 十一ウ　五味子 三十ヲ

江
豌豆 十三ヲ
そにーだ 廿九ウ
天
天門冬 三十ヲ
安
粟 五ウ
蜀葵 四十ヲ
蘭蓀 四十三ウ
左
豇豆 十三ヲ
櫻さゝら 四十ウ
石櫧 十八ウ
山茱萸 廿二ヲ
延胡索 廿五ウ
鉄線蓮 四十ヲ
赤小豆 六ヲ
牽牛花 三十ウ
龍舌草 廿二ウ
甘蕷 十九ウ
獐耳細辛 四十二ヲ
櫻 廿五ウ
仙人掌 四十九ヲ
藍菊 四十二ウ
藍 廿四ウ
紫雞禮花 四十四ヲ
杏 十五ヲ
甘藷 九ウ
蜀椒 十九ヲ
茶梅 廿八ヲ
山丹花 廿八ウ
幾
黍 六ヲ
桔梗 廿五ウ
龍骨木 四十九ウ
金櫻子 三十ウ
由
巻丹 十ヲ
美
柑 十七ウ
之
越瓜 十三ウ
芍藥 廿二ヲ
石楠 廿九ウ
惠
見江
胡瓜 十四ヲ
金盞花 四十四ウ
金橘 十七ウ
壺盧 十四ヲ
同蒿 七ウ
紫菀 廿八ヲ
菊 廿六ウ
さゝきーま 廿七ヲ
桐 廿三ヲ
柚 十八ヲ
蓴 十二ウ
海州骨碎補 四十九ヲ

比	稗	六ヲ	蒲蘆	卅五ヲ	白芷	廿四ウ
	美人蕉	卅八ウ	頼桐	卅七ヲ		
毛	桃	十五ウ	紅葉	四十九ウ		
世	仙人穀	十二ヲ	菖蒲	廿八ウ	芎藭	廿四ウ
	石竹	四十二ウ	剪紅紗花	四十二ウ	千日紅	四十四ウ
	せんだんはぐ	四十三ヲ	薑	八ヲ		
寸	西瓜	十九ウ	水仙	四十ウ	李	十五ウ

草木育種巻之下

東都　岩崎常正　編録

穀類　十一種

稲本草

藏玉集に冨草と名。粘なきはうるし稲なり。其外粳と云粘あるはもちごめなり。是を糯と云。皆百穀の長にして人命のかゝる処なり。是にこせて。なりて。おくて。おく皆三百餘品あるといふ。米は美濃をしてとす。又尾張播磨遠江三河等次でしなり。肥の品作の稲は其上不明なり。八十八夜の前後を苗代の旬とす。田植は立夏の前後を旬とす。勿論風云によりて前後あるべし。田植は卯の日をしるべし。苗代より四十九日め。亦五十一日めを苗見と云て植るなを云へ

○又稲を五人浸蚕茅少し出る時。馬糞と灰と人糞汁にて解
ち成ませ。田へ蒔入るを積田とも。亦蒔田とも云稲を出に田に蒔て
植るなるべきなり。立夏後十四五日を蒔田の旬とす

麥 本草 冬中拔ひ又まやげ肥を入てよし。海に近き地にて六夏のうち
陳釐を腐しさくに入て蒔なり。尤大麥は秋の古用に蒔。五日をいむ。小
麥は秋の彼岸に蒔。戊日を忌べし。熟て麥は生て後拔本を蒔に踏べし

粟 本草 立夏の前後を蒔旬とす。灰汁に人糞をまぜ圃へ引込て
稲を下すなり。又下肥と云あり。馬糞に人糞灰をまぜ合せ。紡塩の形に
碗にまとくんて出涼し。そこへ古成かけ。あらし蚕は生るなり。此後
肥を用ずむ寅と未の日成忌。一種黍粟と云あり。是はおくてなり

黍 本草 春の土用より立夏の頃に種を蒔なり丑の日を忌

稗 本草 植杭は黍と同じ

薏苡仁 本草 和名四國むぎといふ。葉は粳糯に似たり。実の時は
白くなる。皮を去は麦と同じ。四月初種をまき。まやげ肥を用ゆ
べし。又夏中溝の水成蒔に澆てよし

大豆 本草 黒白緑黄褐黒白まだらなる数種あり。三月末に蒔。
丑申の日を忌べし。肥に及ばず。若瘠地なればまやげを入植く
後は肥を用ず。生て一尺ばかりの時捐を搖は実ゆといふよく耘べし

赤小豆 本草 春蒔とす。まやげ肥を入て植。生て一度灰汁人
糞汁を澆は実ゆし。種を蒔に卯の日を忌

胡麻 本草 黒ごまの葉は又あり。蘭草に似たり。白ごまは又なし。
雲に烟人荷なく。灰汁に人糞をまぜ澆よく耘べし○花鏡に云。
種時忌西南風

蕎麥 本草 信濃名産なり。野ち又真ちにてもよし。肥の不ハ土地
にあり。灰に人糞をまぜ用ゆ。柔の澤家に刈なり。或云そだと。
雉子の肉と同しく食をべからざるし合なり。夏の土用あけてより。
十日廿日の間に荷を旬とす。至て早くもハ角中も荷べし

罌子粟 本草 八月種を下し。灰人糞を落して多く澆なし。
又ぜんそうを。罌子粟に似て小きものへ。肥も同し○花鏡云。
錦被花。未種前須糞地極肥。後以釜底烟煤拌撒。用細泥蓋之。

可免蟻食。

菜類 四十二種

蘿蔔 本草 春夏の頃。黒ぐく或形ちの圃を深く耕。灰に人
糞をまぜたる所入て切返し。蓋立秋十日同頃。荷浸に行竜をかける
なり。又紅蘿蔔あり。肉皮皆紅軟にして味よし

蕪菁 本草 大根より廿日も遅く荷べし。畑は深く耕て種べし
又赤かぶあり。合べし。何も肥は人糞を用ゆべし

菘 本草 たうなは。夏中畑を耕し肥並。七月種を下し。小便を
くさらして多澆てよし。むかの陰家を考へ。葉の上より澆てよし。
霜月に丸あげて塩に漬るなり○蕓薹は八月荷を和菜とす。

四五月実ル採。油ヲ搾ル。○牛肚菜ハ松アリ。形牡甘藍ニ似テ小ク大ナリ。又赤キアリ。○蕪鉄ヲ忌ム。七月種ヲ下ク根土乃ヘ入ル。ヨク歩ル中一尺位大根ノゴトシ。葉ハ蕪ニ似テ大ナリ

苡本草　菘ヲ作ルト同ジ

菠薐本草　秋ノ彼岸ヲ実ル荷。又春荷ルヨシ。人糞又小便ヲ焼ベシ。畑ヘ荷ケルヨシ。根ノ附ハ脂アルモノヽ

葛遵菜本草　秋実ル荷。ヨク小便ヲ焼ベシ。熱ク菘モ蔓菁ノ苗ノ如シ。皆雨ノ降ヌヘニ肥ヲ用テ。ヌカルヘカラズ

同蒿本草　秋ノ彼岸ヲ種ル荷。葉ヲクヽ又真ヲトルヨシ。肥ハ灰汁人尿ヲ焼テヨシ。又春荷ルハ秋月含ベシ

番椒花　一名海漏藤俗名蕃椒花鏡寺部云

○本邦ニテ煙草ヲ用ヒル事ヲ始テ聞ル時ハ番椒ノ名アルヲ以テ番椒ヲ煙草ニ用ヒルト思ヘリ

○ニンニクハ古ヘ葫ト云ヒシ物ニテ今ハ蒜ト云ヒ慣ヘリ

○薤ハ実大ニシテ葉ハ韮ノゴトシ

○茖葱ハ実小ニシテ葉ハ韮ノゴトシ

冬葵本草　葉ハ蜀葵ニ似テ圓ク。花ハ向ヲ小ク。真土赤土ニヨル。秋実ヲ荷ヒ冬春季ニ採菜トス。春荷ヒ夏秋菜トスルヨシ。四季トモニ食ベシ。味美ニシテ毒ナシ。臭腥水ヲ焼テヨシ

薑本草　山ノ北ヲヨシ。四月種ヲ植ベシ。粉藤ヲ下ヘ切ヨゼ。莖苅馬糞ヲ根ヘ入ルヨシ。日ノ未陰ル所ヨシ

○蒜ハ六月種ヲ下ス。二月分植ル。奥州人糞ヲ一番ヨシ。

管のごとくみじかき。
二尺あり。二八又は八〇
種を播く時肥えたる地を
又よき地もの一人実
油をとるもの一人実
あらば多く用べし。
ひあるときの糸になりく
子あり大切に実也。根
ばかりにてよし
○西瓜を食ひ停時
食ひ解しまた小
業風にて乾し番椒
のみを若しは粉沽

蓼本草

たでの類多し。一相反
蓼川の水蓼。香
ありて味は大に辛
ちよ唐辛子のごと
ふく。そも多り地こ
ふ一ぶのたぐひ

葱本草

十月種をまき。厚く人糞をまぜ根ふかへ入てよ。根もと
ころ茎をとべし。○川葱ハ春分で刈とる。別葱ハ秋多るのり。
○信濃の産。一本葱ハ一本で分て植るといふ。白根の長さ一尺許
ふく。太さ尺八のやく上品多り

韮冬本草

根のとふ紫色ある八夢ふるのあり。茎を菜とする。又
ふさのたるを。苦味有。上品多り。又赤ぶさ。多も莖皆赤し。
又秋冬ぶさ八多も茎を甚大多るをとる。江戸にてハ多の大さ二
三人位多り。苦味強し。又たるを大多れども味よろしからず。葱よりふさ八
本淡き種。秋多ハ根の土へ細き苗を植べし。肥を多ぎ
うゑ

山の荒地を三尺人も掘内を平ゆるそ低く一種ずゝ植。苗の始

より莖苗の間ふく。木の枝竹等の紙指種。細き苗ぞろを。陰く厚く
覆ひ置。芽多る時石の苗を取除根へさゝらぬ物よ芽を切べし。
むろく芽をそろ〳〵へ又苗のごく苗をを植べ又芽とけろり
芋本草

白芋薯芋車轂芋くりいも茄蓮青芋等あり。
何を山畑を深耕し。四月に一尺ろ五寸ろ植いもと一つろ〳〵植。初低植
陰く行壟を切そろり。人糞を三度程焼べし。馬の跡ろ藁或ハ
くさろ〳〵藁を根もと〳〵厚渡ひ置て。日光を甘べし。○薯芋ハ。
肥ろ所ばかりさのこ生芽くろ。○車轂芋ハ。植る時芽を一つ
かけく豎植きり。切口へ灰をかけく植べし。○青芋ハ。莖苗を厚く
覆ひ。ひえく多を根のもとよ。○茄蓮ハ。莖を生ふて食はべし。植て

芋ハ九十月皆掘あげ。山の日あたりよき崖を二三尺もありて埋
たをかけ糞を貯置べし

佛掌藷 鎮江府志

四月に いもを切く。切口へ灰をかけ。山圃へ穴を四
五寸掘。土をよく柔にこなし。土へ紛の柔を多くませ合て植。蔓
出て後根足へ人糞を入べし。九十月に掘れば大になるなり

黄獨 鎮江府志

貯置るかしうむらごを。四月に山畑に穴をあること
四五寸一ツ植るべし。むまやけ肥をたへませ植べし

甘藷 本草

又琉球いもとも云。薩摩より来り。諸國に多し。武
蔵相模。上総。安房。等の砂地にて作るの味よし。皮に赤きあるの
上品なり。山にて作るものハ形大なれども味劣る。赤たにても砂

まぢりたるにへハ作るべし。四月甘藷を植て生ずる。葉ハ蕺菜に似て
臭氣なし。芽ハ紅色なり。葉を摘ば白汁出。蔓一二尺になれば曲て
地へ伏たれば。又延きば右の如。度々たををれば。節の所より根をなす。
甘藷となる。肥を用ず○生にて根を掘て水飛し。葛を採べし。玄
上品なり。根をきりて焼或煮て食して糧を助。肥を用ざる少人
民用に益あり。又小児食て大便を和あり虫を生ずる。又疳病によし。
常正按ずるに。砂糖の甘味ハ脇中に入て変ぜざる也。大人小児ともに虫
積痞満に悪し。甘藷の甘味ハ脇中にて苦味に変ずる故。大人小児の腹
中を調和するハ此故也。然ども性粘滑なる也。多く食ハ停滞し安し

馬鈴薯 松溪府志

せうろいも又ゑぞいも。又おらんだいもとも云。蛮

名カイトース 亜墨利加方言 ヤアフルキト 同上 ともいふ。葉は菊に似て大なり。
根に塊ありて。黄獨に似て鬚なく。皮薄して少し赤きあり。焼
又煮て食べし。種るには四月に野なの肥地へ種人糞を澆てよし。
十月根を掘採。種にするには芋を貯ぬく。日向よき地を深く
掘埋置。春の末あり出して種べし

茄 本草 二月に代の内へ種をまき。まやげ肥をして四方を囲
置べ。暖めして又鳥をも防ぐ。生て二三寸になりて細へ移べし。圃は
三年ゝ四年も茄をうへざる肥地へ冬の中人糞を入耕置。種時
灰を蒸せたる肥を切まぜ種るべし。根づきて折々油糟人糞等澆べし
○茄はよく煮て。あくを出し食べし。なま漬又は焼なども毒あり。

多く食べからず。必痰飲を生じ。又瘡家に悪し。婦人下部の病に悪し。
小児には控てよし。五疳驚風を生ず。大人も多食べ。腹中に寒湿を
貯へて。終に脾胃を損じ痢病腹痛せしむ。熱て諸病に忌てよし。
毒あると挙て数べからず。然といへども世人常に食有り。田舎にて
多作を出せるなり。茄は價賤して久く貯るゆへ利に走。又毒菜ゆへ
あまりしと云ごとく。茄も味よき有り

巻丹 本草 鬼ゆりは花紅色なり。花の白は百合に似て薬に入
べし。食料のゆりは。真ちかく細き砂まぢりなる地を柔く耕し
あの内ちへ籾糠を切まぜ蒸極る時。灰人糞を切まぜ墾て種べし。
雞屎を用てむよし。葉の乃に生ざる実を生ずるなり。ちへまぜ貯置

捶べし。苑の出る梢を一尺餘も摘切バ根に実入よし

甘露児 本草　　肥田の湿地に宜し。魚洗汁人糞を澆てよし。九十月に根を採よく洗熱湯をかけて醤油味噌などに浸て食ぶべし

蒟蒻 本草　　上総にて多作出る。是も茄と同く。一年捶れバ畑苑荒とあへ。一二年休て畑苑整て捶べしといふ。○春の末。葉に先て苑を生ぎ。筒の形にして長く内より蟹の様なるものを出す。色青し。後葉苑生ず。形虎掌に似て葉の数多し。捶る地ハ山畑の日陰よし。根もとへ細き茎を入。春灰人糞を用てよし。秋根苑掘ハ根大になる。傍に小き子を生ぎ是を分捶てよし

鹹蓬 救荒本草　　砂真土に宜し。春彼岸に種苑蒔。魚洗汁澆てよし。又海魚に自生ぎるもまゝなるハ低して地に延。○岡水松ハ。又陸ぶじきとも云。形状濱まつなに似て葉なして肥ひ。実を採砂にまぜ蒸て喜ぶともに蒔うゑべし。煮て菜となし。又吸物に用て味よし

仙人穀　　文化丙子年初て多く捶。莧の形へ喜の彼岸に種を蒔人糞汁魚洗汁等度と澆べし。葉ハ鳳来紅に似て。茎ハ雞冠に似たり。秋に至て長穂を生ぎ。形莧に似て下に垂て一尺餘に至。葉を採菜となし。又実の熟したるを採揉て吹火にてあふれバ白くなぜたるを罌粟を用ゐごとく。諸の菜へ振かけて食ハ甚香

蓮 本草　　秘傳花鏡曰。菜餅或麻餅屑壅。又藕枝頭向南。以猪毛

少許。安在節間一云取酒甕頭泥種。○田に作干鰛を用ゐば。根たふして軟なり。味甚美なり。めちだすといふ。盆栽には泥の中へ田作を交こさし込てよし。冬は地へ鉢ともに埋蔵べし○実植は殻の内の肉にさらぬ様に皮を削て清水に浸葉を生て泥へ植べし○白蓮。紅糸蓮。朝日蓮。牡丹蓮。等あり大抵同し手入ふてよし

慈姑 本草 下総より種くるひを生ず形小さしれを三口月田澤の中へうゑ。肥を用ひず。若用ゐば干鰯よし

烏芋 本草 所々澤池或沼の浅所へ植てよし。葉は蛇の葉に似て大く根は慈姑に似て硬く黒し十月に掘採生にて合べし

蓴 本草 和名ぬなわといふ。古き池にはよく生ず。葉は蓮に似て小く切込なく。葉の中に莖あり。冬の内莖をこりを入てよし。つよき肥は悪し。池にても水濁て腐たる所にては生じ難し。水清く綠葉なる池へ植べよし

豇豆 本草 長さしげ。畑さしげ。あり何のたにてもよし。湿地を悪し。三口月にまやげ肥を引込てその所へ蒔べし。生て後灰汁人糞汁澆てよし。又代へ蒔く畑へうつすもよし

隠元さしげ 白きあり。黒きあり。紅きあり。皆まやげ肥にて日陽の地へ植。竹を絲纏しむ。根是へ魚洗汁人糞汁を澆べし又五六月種を植れば秋の末まで実あり

豌豆 本草 砂真土によし。秋彼岸前に種を蒔。肥は灰人糞等

用ゆるよし。大抵蚕豆の手入れてよし

蠶豆 本草　砂真土によし。七月種を蒔き冬中灰に人糞。又は干鰛等をまぜ根足へ澆べし

刀豆 本草　四月種を代の内へ蒔。まやげ肥を入て畑へ穴を掘て植るなり。打て灰と人糞とまぜ澆てよし

越瓜 本草　三四月代へ種を蒔。苗一寸程になりたる時。圃へ三尺四方を乃至おいてまやげ肥を入て植べし。夏中人糞に溝の水をまぜ澆べし。又苗を植る時干鰛を粉にして砂へまぜたるを植へまぜ星 星とは口辛の大さに穴をあり右のたねてうゆるなり へ植付てよし

將酉瓜 本草　大抵越瓜の手入に同し

胡瓜 本草　植る畑を冬中人糞に溝泥をまぜ入てよく耕し並。四月種を蒔くよし。又干鰯を砂へまぜ根足へ入れ実るべし

冬瓜 本草　代へ蒔るを。二人四方も乃至動て圃へ穴を掘まやげともに植。根づきて後人糞を藁茎にまぜ合せ根足へ並。又糞洗汁を澆てよし

番南瓜 群芳譜　まやげ肥を入て蒔付人糞藁茎等を根足へ並べし。かぼちやも手入に同じ ○番南瓜を多作蒔を採べし。法は蒔粉を採と同じ。先とうなすを採て雨に生にて摺澤を搾。又其の瀝と五三度してまゝの瀝水を出せれば。蒔粉のごとくになるなり。味もよし

壺盧 本草　四月初種を代へ蒔付まやげ肥を入て星へ植べし。棚を拵へ上へ纏せてよし

絲瓜 本草　四月初穆瓜荷竹を添纏しむ。人糞魚洗汁溝の泥などを根に澆べし。蔓ちま小き間味噌を付く燒て含べし。又大なるを輪に切れを入ぎ煮れば汁出るを煮法也。瘡の葉に用ゆ忌効あり。又葉も莖も皆粉にして用るもよし。又八月十五夜にあたり上一尺餘に切あるを陶器へ入ぎ蚕ハ切口より水滴る也。又瘡嗽嗽に用てよし

江南竹 八閩通志　又雪竹とも云。本暖國の產なり今所に植。甚よく筍を生ぎ根めとへ籾糠を多く入べし。よく筍を生ぎ。植移ハ五月十三日を竹碎日といふ。此日に植れば大に活なり。竹よく實入る間枝の下の三分一梢を切るもよし

苦竹 本草　花鏡曰。竹園宜用大麥糠。或稻穗。添河泥壅。又死猫

引他人竹。○杉林の多く植こめば。竹長くのび又雪折も少し。然て竹の根めとへ藁を蚕ば根腐めのなり。馬糞籾糠ハ多く入てよし。植移ハ五月十三日より。又正月元日二月二日三月三日植てもよし。冬月ハ悪し。材に用るにハ八月に切ば竹實して虫少し

果類　二十五種

杏 本草　桃砧又李砧に接べし。樹ハぶんご梅によく似たり。花草にて紅し。又八年をもあり。接枝移樹肥皆梅と同し

梅 本草　冬中根凹を掘人糞を入れば實多し。二月初桃砧へ接べし 接法ハ上巻に見へたり 又十二月に接ば實接といふ。然ども春がよし。梅砧へハのり悪きものゝ。李杏等に接るハ甚榮。桃へ接ばよく生出さと。根へ出ば

かけ蚤ハ月然に梅より根を生じ。桃砧ハ朽るなり。梅の種類多し
百余ニあり

李 本草　李杏梅桃の類熟して秋実を栽ハ春生ず。二月桃砧へ接く
よし。多年根旦を握人糞獣肉等を入てよし

桃 本草　種樹書曰く。桃ハ五行の精百鬼を制す。是を仙木と云ひ
いへり。故に桃にて符を作るも百鬼を制するなるべし。桃種類多し桃ハ
十年より老て実なく虫多し。左に実を捨べし。秋府ハ春生ず。
真土に捨てるハ悪しく生ず。赤ちゃくハ虫多し。湿地にてハ悪し。乾
たる陽地によし。日陰を嫌なり。二月上旬に桃砧へ接べし。三月枝を切
さしてよし。多年根旦へ人糞を澆ハ実多し。又桃樹老朽て洞に

なりたるハ却て数十年をたもつものゝ。種樹書曰。桃樹過春以刀
踈斫之則穰出而不蛀

栗 本草　荒地或ハ道傍に捨し栗の陰にハ諸の作物出来ぬものゝ
十年餘に至ハ木老て実に扁子多し。伐て材とすし。又詰人実を
府捨べし。よく生出するものゝ。又栗あり枝皆下に垂ると云ふれ梅の如し

梨 本草　甲斐相摸下總等にて多作物まぢりたる真土より根の土
志まりたるゞよ是に小砂利を突込処をあり。寒中人糞又酒粕等
根旦を握て入べし。なさあらんに棚を拵へ枝を結付てよし。又花
咲たる時一房の内実の大なる弐一ツ二ツ残て紐を摘捨たるもよし
梨を種類多し。中にもあり雪あをすし等ハ是せにて味よし

林檎 本草

江戸下谷本所邊の土地に應せり。根旦を少しなく
植て湿氣を滲べし山の肥ある赤土皆無し春の彼岸に海紅の砧へ
接べしむきり接よひ接ともによし又海棠の根を採て砧にして
接そよし。九十月に植替てよし。十一月頃より小木は近く。大木は遠く
根旦を掘根先の細き赤は切とよし。冬中腐る人糞を澆べし
三四月の頃多虫を生ず芽より生して葉を食ふ小蛋虫巣を
かくるをよく去べし又梢に鍛のぬき卵ありて鍋のある毛むしとなる。
燈油を付て去捨べし二三月頃古枝を伐さるべし。種樹書曰。林
檎蛙以鐵線尋竅内鑽刺。用百部杉木丁塞之。如生毛蟲。以魚
腥水潑根。或埋蚕蛾於地下。

榲桲 本草

葉も花も林檎に似たり。実は榠樝に似て圓して毛
あり。根より多く小科を生ずるものも是を伐分て植べし。梨を化して
棚にされば風にて振落すとなし。肥は梨と同し。秋熟して黄
色なる時採て熱灰に入焙食べし。又生にて薄切壓石をもて
汁を搾出し。砂糖に漬てよし。又砂糖にて煮ゑし菓子に化べし

柹 本草

種類甚多し。蟹と同食べからず。種を植れば多は渋かきと
なるものなり。春彼岸より廿日程ゑて渋柹の砧へ接べし。こゞきたる
芽にて堅く巻べし。冬中根旦を掘腐たる人糞を入べし。又獸肉皮
なども埋もよし。植替は九十月より六月土用中に一度肥を用ねば
秋に至て実落ぎ

香橙 花鏡　九州四國紀伊等の暖地にて八月実を結ぶ冬中根
足を掘。人糞に灰をまぜ多入又獣肉とよく腐して入るもよし。七月
肥をとるを忌。虫を生ずると花鏡に見へたり。百年虫を忌べし。二月
はよび接。我は切つぎにしてよく活おもり。む砧は皆枸棘に接てよし

柑 本草　紀伊國名産なり又有田の産を大なり。柑橘の類暖
國にて赤土によし。二三月の頃柚へ接てよし又枸棘の砧へ接もよし。
冬中人糞又獣肉等を根足へ入てよし。柑橘類七月肥を澆をよし
米泔水を澆ハ実落ず。柑橘類を貯ふ。緑豆の肉へ納蚕バ去
まぐたりつべしと花鏡に見へたり

金橘 本草　山の赤土冊云によし。冬中人糞獣肉等根足へ入て

よし。盆に植るハ三月頃植なるてよし。砧ハ枸棘へ接べし。○金棗も
子入同しことなり

柚 本草　赤土冊云等によし。二三月頃枸棘の砧へ接べし。冬中灰人
糞を根足へ入てよし。又獣肉を入バ実多し

無花果 本草　鄙に古枝を切さし。宝中人糞を澆べし。又三月頃
勢よき枝を切採て地に挿。水を家に灌後人糞を澆べし。其年実を
結て忌大なり

楊梅 本草　実ハ蛇苺に似り。植てよく生ず。山の暖地によし。
初の葉ハ梔のごとく冬を拾落ず。大木になれバ冬青の葉に
似たり。冬中根足へ灰人糞を澆べし

石榴 本草　花に紅あり。八重あり。綵纈は花の圍白し。又白花のものあり。惣て二月枝を管に切て挿はよく活ものあり。又惣の被岸によびつぎにしてよし。其中根見へ人糞を入れ花実多し

茶 本草　茶の事は。本邦にては本朝食鑑及大和本草に詳し。葉上僧正入宗して。重て種を後せしあり。始て後にあらずと貝原翁云。本邦喫茶は。榮西上人より盛に行ると云。宇治にては上品のものは三四月に芽の出る時。綟麻布のあれにて。四方を囲。中竹の葉は蘆簾にて囲と云。捲る云は其云。或赤土にて砂のまぢりたる地よし。真土。泥なる悪し。湿地に宜からず油糟。人糞。酒粕をおくに根見へ悪べし。又米泔水などにて用てよし。把ふさるは宜からず

蜀椒 本草　朝倉山椒なり。山なるよし。冬実成時は黒生ずと。于綱溝泥等用てよし。人糞を忌。又刺なし山椒あり。樹に合て刺は。又常のさんせうは多くは実を結ず。黒皮を樹の半分竪に剥て半分は残し悪べし。これ辛皮なり

葡萄 本草　甲斐にて多作り江戸へ出す。紫葡萄は実宜し水晶葡萄は実青緑して味甘し。棚を掘て蔓を栽べし。三月に枝を切挿バよく活なり。又鉢の穴より蔓を引出し。鉢へ土を入蓋。秋に至て鉢の中外処より切採バ実を結ぶ。まゝにて盆栽となる。其中人糞に酒粕を根見へ入べし。花鏡に粘の糞を用ると云

甜瓜 本草　本。美濃岡真桑村より出るもの上品あり。故に名と云。江戸

叩ふ村より出るもの又上ふなり。下総より出るハ下れども大にして味劣ア。是ハぎんまくハとゝふ。手入肥の法ハ越瓜と同じ

西瓜 本草

常陸砂山。上総下総安房等の砂地なり。三月末種を府于鰮を刻炒臼にて挽粉にして人糞とまぜ又炒へまぜて。畑へ穴を掘。その星へ植付るゝ。むこ人口牙刀紙を重て一本植るゝ。若しまゝ肥ふ足に見ゆるバ。人糞汁深泥など澆てよし。又白西瓜あり外皮淡緑くして。纔白し味又甘し

甘蔗 本草

海辺の砂真土に植べし。去年囲ふる茎を二節結て切。芽の所を横にして一足つゝに一本植。生て糞洗汁をそゝぎ。傍に生ずる小科を切れべし。秋に至て茎に汁の深なる時。切採て搾に

そそ汁を採。莢蛤粉を入涼し。重バ黒砂糖となる。是を又を焼の甕に入二莢て下に溜るものハ白砂糖なり。扨秋切採とさあらず。たかしどして実ふる茎を撰。来年の種に貯べし。其茎を砂へ入。日陽よそこゝなき地を掘埋。重ふ云て掘いぶし。右の如して植べし。

物類品隲に図あり考べし

落花生 典籍便覧

香芋 花鏡 とも云。和名とまめ。又長崎にてなんきんまめといふ。紀伊國にて多作。然ふ。黒ぐに砂まぢりの山畑にて。陽地へ植べし。冬中畑へ灰人糞をまぜ耕。重別に代を拔。落花生の莢を剥て。足ざるり淺く植。葉をはしく畑へ植べし。お茶の地なれバ畑へ茶に府付てよし。植る圃へ籾糠を切まぜ墾るがよし。

葉のあるより根を下し。去年に入て莢を結ぶ人。たゞ葉なるのよし。十月根ほりを遠ざかりて採べし。あらかじよく洗二日程乾紙袋に入て風のあたる所へさげ蒸炒て食し。又挽て粉にして餅などにかけ食へハ香く味よし。脾胃を補効あり

玉蜀黍 本草

冊去真去ともによし。三月種をまき。圃の北側のへりへ植れハ陰なくしてよし。灰汁人糞を用べし

淡芭蕉 漳州府志

烟草とも云。真去にても。赤土にても砂にまぢりて締たる土地に立。其年に作る烟よし。三月代へ荷付他の草と遠荷なる所を踏付てよし。葉の内雞の屎或馬の屎。等紙なるに把に用。然ども烟草舌に沖と云。又灰を入ハ虫ぶし ○花鏡曰。烟花一名淡把姑。細切如線。後美其名。金絲烟。一名返魂烟。一名擔不歸。可以祛溼散寒辟除瘴氣。但久服。肺焦非患。隔即吐紅。或吐黄水。而殞。抑且病。投藥不効。總宜少喫

藥品類 三十九種 並服器に用ある物 十一種

人參 本草

朝鮮種人參なり。植る土地ハ山にて高きにしよし。白めなる砂地にむ色。人參耕作紀又物類品隲に黒ぶくに植ると云。しの黒ぶくハ。今云黒ぶく云とハ別の物歟。今云処の黒ぶくに植る時ハ根腐易し。赤土に白めなる砂をまぢくらひにまぜたるに植べし。人參にむ蒸さる地ハ下野國都賀郡日光山信濃國などに白めなる砂地にてよく出来るなり。植るにより南の方に並ぶまして。南風の塩気をさ

防。北風の陰気を入べし。右に海垂にてハ出せず。種るにハ竹の筆ノ紙
あるに出へ埋。鼈鼠を防べし。多作にハ鼈鼠を捕べし。法ハ上に在 実だ人
の内ハ搭棚を低作。北を高く南を低。松皮にて葺。撩檐のぬく掛。
日と大雨を除るなり。人参三四歳に至ハ。葦簾或女竹を編て来に
かけ置べし。或滴人参にかゝりても苦かたし。却て勢気を益こと
あり。肥ハ荏の実を荷芽を生じたる時盤。又荏の莖をたへ切まぜ
たるもよし。又夏の内人糞をたへまぜ置。寒にいてさせたるを根見へ切まぜ
置べし。種付たる所へ来に肥を用ゆべ。蘆頭腐めの人種なるにハ右の
肥たをまぜて種べし。肥るかわれバ種子の表を生ずるなり。人参ハ夏
実のり赤くなりたる時。採てたまぜた中に埋置。十月に至て種る

時右の荏を切まぜたる方に入実を種べし。初より人糞を用るハ
悪し。二年めより少ツ方へまぜ用べし

甘草 本草　和名鈔にあまきとゝ。本甲斐国に甘草あり。今又二
種あり。葉小く圓して。根横に延ざるもの上品にして南京種に近し。
一種ハ葉紫藤に似て小く。根細くして蔓の如節ゝより芽を生
ざるもの。是後の種なるべし。ともに三月に芽出ざる時。掘て節紙
籠て三四寸くらいに切て。山の縁なる赤土を深掘。右の根をたすに栽
よく根見を踏ゝなりては。土柔なれバ腐めのなり。少しが肥たをまぜて種べし

芍薬 本草　延喜式に。ゑびすくさ。歌書にかほよぐさ。と云種類多し。
大坂より江戸へ多送。其内上花あり。種る地ハ大抵赤土にても。

真云にて是ゆまぢりて粘あるなり。其の内人糞或ハ馬屎或
烟へ切まぜ蚕捶べし。八九月根を分捶てよし。又藥によりて花の
品を分なり。奇花に非ずして根を藥に用べし

牡丹 本草　和名ちろうくさ 詞花集　ふかみくさ 延喜式　なとこくさ 万葉集

といふ山城にて多く作。又大坂にて接江戸へ送ると聞えし。秘傳花
鏡に百三十一種を載。惣て赤土に合肥を切まぜ捶てよし。又ゆをよし
入たるもよし。接法ハ常の牡丹の砧へ付て接にしてよし。群芳譜に
牡丹八月接べし。又枝を扞て活といふ。花壇綱目に云九十月此ゆ
分捶。根のとを立て捶るなり。霜月初より馬の踏たる藁馬屎なる
厚蚕。其に立て見べし。ゆだりに油糟一升をとまぜ。此に穀茎乃

なき根に接て蚕なり。花の内ハ日覆してよし。夏ハ茶滓を根にて
置。晩景に米泔水或ハ糞も湿をと灌てよし。牡丹の芽に泥着たる
処あらバ。米泔水にて洗べし。木に白虫付たる内是を洗ざるバ木
拆る。実の荷根ハ六月土用迄七月初に実を丸ゆ荷之茶滓一升に
ちゆまぜて。其上に菜がら五分をどかけて。蛤貝かぶせて蚕なり。
二月中旬の頃右の貝を見べし云と。肥ハ人糞を多く切まぜ。百日
をど稀し蚕に用べし。又猪屎を用又狗糞を用て妙なりと花
鏡に見ゆ。然ども群芳譜に牡丹を忌犬糞と云り。種樹書曰。牡
丹花上穴如針孔。乃異所藏處。花工謂之氣倉。以大針點硫黄
末針之異乃死。或百部草塞之。貝原花譜曰。牡丹冬至前後鐘

乳粉と硫黄とを末し。根を掘開て周圍に置べし。来春花盛なり。
牡丹道知事に小科を白子と名く分植べしと云

黄連 本草　加賀菊葉の黄連上品なり。又薩摩の大葉は菊葉に似て甚大なり。是亦上品なり。葉に入てよし。又芹葉の物に数種あり蝦夷の芹葉は至て細く奇品なり。又五加葉あり此類に三葉のものあり奇品きなり。此等は根小にして葉に用ゐ堪ず。然て植る法は大抵人参を植ると同し。云地は黒ぶく砂石等によし。日陰の地に宜し。若日陽なれば竹ゟ蘆の簀を編。日覆してよし。雨は箕のるより かゝることもよし。湿地を嫌。肥に及ぶ。折々米泔水を澆べし。八月分植随分るを近く植るがよし

防風 本草　是は葉に入なり。料理に用るおうふうとは別なり。防風は享保年中漢種渡今多し。山畑の砂石原き地に植べし。春種を蒔なり。又舊根を植るは二三月よし。竹にて穴を深くあけ入て去紙葉にさべし。尤畑を多年に肥重べし

當歸 本草　二月種を蒔。人糞を少し用。三年にして花あり。実を採重べし。云地は牛房など植るなれて。赤なる砂石に細なる砂まぢりたる地に宜し。寒中人糞少用よく耕てさし。二月植替てよし。五六寸の紙おいて植。桜の後人糞を澆べし。十月十一月に根を掘採。米泔水に少ひたし。土気を去毎日日に乾。壷に入て貯べし。湯に入て干バ性味薄くなるなり

白芷 本草

延喜式によろひくさと云。山城にて多作り生と。此方の把地人妻の彼岸に種を蒔べし。植て二年目の十月根を掘採菜に用。白芷當帰獨活防風防葵の乾皆三年めに薹立て。花実あれば根空虚になるなり

芎藭 本草

蜀の川州より出る紙上品とする川芎と名く。本邦にて通じてせんきうといふ。寛永年中長崎より種栗と云。大和吉野にて多作。少し水はなりの山にて肥地によし。冬中人糞を入耕垂二三月に植てよし。芽生じて夏より秋までの内陰に把を多入べし。十月末に掘て細糞根を去。大なる塊を乾て菜に入用なり

莪茂 本草

漢種のもの二種あり。形状蔚金に似て。其の中に紫色あり。此根淡赤し。按ずるにこれ真の莪朮なり。一種は官園に多植。葉に紫色なく。根黄色なり。然ども蔚金とは気味少く異なり。此真の薑黄なり莪朮に非ず。植る地は赤土肥ともによし。大抵芋を植るぬくにしてよし。夏も多く人糞を澆べし。十月に皆掘あげ乾て菜に入べし。又よくしまりたる根を来年の種に貯べし。むすを缺ぬ根迄て但莖を切。根はそのまゝにて。南に向て山の崖北日あたりよき地を三四尺掘て。根を埋垂バ寒中傷となし。口月に入て掘いでし親根を捨て次植べし

鬱金 本草

葉は蘘荷に似て濶。花は穂をなし色白し。根は芋に似て長く黄色なり。山畑に植べし。冬中根は囲垂と莪朮のごとし。根を菜に用

高良薑 本草

葉ハ蘘荷に似て高く大なり。其ハ拈ぎ夏中人糞を澆。十月中頃より唐むろへ入べし。暖地にてハ古藁に入てよし。また くまたけらんの一種に丈少し低して花白きものあり。是壮若なり。

燕子花の下に詳なり

桔梗 本草

花に碧色。白色。ともに重瓣あり。又綻ありまの彼岸に種成蔚なり。根分ハ二月十月よし。其ハ人糞夏ハ魚洗汁澆てよし

龍膽 本草

山の崖などにあり。植る地ハ赤土又粘ある所云に[illegible]米泔水を澆。卵の肥ハ悪し

延胡索 本草

漢種のものハ牡丹葉と云。其葉牡丹に似て小なり。根圓零餘子のごとくにして黄色なり。又尾張國より来るものに三種のものあり。形狀ハ牡丹葉に似て葉中に雲斑あり。花ハ皆地錦苗に似て大なり。二種ともに葉用に上品なり。又同國より来るものに所葉のものあり。葉ハ細く所葉に似て高くなり。武蔵國道灌山に生ずるものハ所葉に似て。葉稍濶く。根小く澆白し下品。山の所云悪ぶくに植べし。秋葉の中。灰人糞にし入て肥蚤。植なるべし。兎好で此根を掘食ものなり。よく囲置べし

地黄 本草

延喜式にさねひめといふ。山城大和筑前にて其他上品紅花のものあり。黄色のものあり。何も十月根を掘採。乾めなる日陽よき地に埋置四月に至て根成二寸に揃切。赤土に加まちりたる肥地に栽べし。むかし寒中人糞を入耕曝蚤。栽て後根見へ厩の

藁莖並ふる屋ゐるを入てよし。葉ゐよく粒べし地黄の根を貯るに桶ゝ或
藁ふごの中へ細なる砂を入十二月の頃掘採て埋を砂いけといふ。
葉ゐ入てよし

菊 本草

菊の類ハ実だへにて年と花形変ゐその数を知ず。花
鏡云如劉蒙泉菊譜遂有一百六十三品。范至能。史正志。馬伯
州。王蓋臣。皆有譜其名目至三百餘種云々。菊の実を蒔ふハ
山の野云の肥たるゝ又黒ぶくよもよし。湿地を嫌ふ。ゑるき所にてお
庭のたゝ肥たゝ合代を掘て肉へ二月初ふ蒔。そよく藁の多く
細き藁をふし振かけ。苞覆をして蒔。生ゝ後ゑ藁を多べし○掘る
地ハ冬中。野云或黒ぶくの肉ゆく。菊を掘ざる肥地を掘。その上へ

人糞ゐ流。よく切ゆせ寒ゐいときせ蒔。又人糞を入。右の如きることこ
度ふしく雨を除蒔。二月比墾て日ふさしし掘るゝ○根分ハ九十月比。
根ゆとより生ゝる芽を分とりて別ゐ掘く。蘆簾を低かけ雨を除蒔。
春ゐいたり清明の頃ゐ掘。花壇へ瓶の大きふ星ゐ掘。そ中へ右の
肥たへ鳥の屎と。烟草の茎を切ゆせて星一ツゐ菊一本掘べし。又六七
月のゐに一度糞けと根ゐへ入るもよし。肥を多く澆バ蕊枯るゆゑ。
菊譜云養花易。養葉難。又曰糞水葉ゐ著べからず。泥ゐまゐ洗べし。
又曰以韭汁澆根妙。又清明の頃分掘るもよし。何も舊根をよく
去べし。宿根より虫ゐ生るゆへなり。菊經曰死蟹釀水澆灌不生
莠虫。花鏡云魚腥水去蛀。蚯蚓地蚕傷根。以石灰水灌之自死。

速捋河水連澆以解灰毒若黒蚰瘠其皮以麻裹筋頭捋之則出若象幹曳似蚕青色與葉一色食葉須早起以針尋其穴刺殺之○菊葉入りの八甘菊。野菊いろなり。花と葉とるに中菊。大菊なり。其中菊の作根は扇造。帚造。ゑとゑ根分曲ざるに。よく梢を切て枝をふりせ。五六月にいたりて切くよし。夫より一枝に花一ツ着。其外の枝蒼は皆摘去べし。初より竹或は蓆とゑ。孫隙席のあつしにて結身てよし。是は帚作なり。又根分曲て作るには莖を左へ伏て。竹の枝を作て挿たくさし込て止るなり。是は扇作なり。又大菊などは四六月に雨のせ川勢よき梢又幹を管に切て肥たく挿。根分生じて人糞汁を澆ばよく肥て花大に咲ものなり○夏菊は八月根分挿てよし。寒菊の類皆秋分るなり。又ふだん菊は夏より春のうち花咲ものなり。然て菊は夏又は大概をしるとゆへ。必是に止ず。深山の菊は熟は菊繪に見へたり。又種根は種樹書に見る

薄荷 本草

めぐさと云。野生は湿地に栽てよし。魚洗汁にて澆てよし。夏の内刈て一日日に干。そのより陰乾にすべし。葉に用るには秋さ行よし。古きは気味薄なるなり

紫菀 本草

二三月に根分挿べし。其云へ細に莖を切るべし。溝泥又魚洗汁等に灌てよし。挿花に用る

酸漿 本草

根分は二八月よし。湿地を好むなり。魚洗汁人糞を澆ぐなし。又瓔珞ならづきは実の形長刀ならづきに似たり

望江南 救荒本草

又蛇滅門草と云。陳藏より来る。薩摩後河伊豆安房等の暖地によし。寒国にこれ生ずし。四月種を蒔べし。形状馬蹄決明に似たり。実を結ぶ。速に人事陳ば実のうぢ。この根採ゆれば夏中度々無洗汁人糞等を灌。十月にかり庚むろへ入金ハよく実入なり。其幹枯ずして春に至て芽を生ず

商陸 本草

何れの地にも毛よく生ず。肥に及ぶ実を蒔てもよく生ず。根大くして数年枯ず。葉を採ゆるて搗切葉とまさべし。後に ふるはしば苦みなし。此根水腫を治す

菖蒲 本草

種類数十品あり。漢云西湖の邊に生ずるものは舶来る其形状本邦の石菖に変となし。又有栖川と云ハ葉の先皆上に向

あれ又漢種なりと云。又竪に黄色の筋ある根黄金。又虎の巻なりと云。又葉の面白く背青き根晝夜と云。其外高麗雞尾等なるべし。又両根と称するものは。根の両面より鬚根を生ずるを云。常に石菖にも多き事にハ自然に両根になりたるものあり。又両根を植る法あり。常の石菖ハ皆根の腹より鬚根生ずるを片根なるを以て。葉と鬚を剪て根ばかりを竪に起て植金ハ両方より根を生ずるなり。然れども久く植金時ハ。常のごとく片根に返る。又石菖を石に着るにハ。葉を剪て根を石に添て。細き針金にてしかと止て。絶ず水を灌とかハ鬚根皆石に着ものなり。花鏡曰。鼠糞蝙蝠屎を水に和し澆ハ栄るといへり

木賊 本草　砂真なるよし。山の野に是なくなると悪し。油糟魚洗汁等灌くよし。米泔水を打て澆もよし。八月分挿べし

萍蓬草 本草　廣き池に挿るは肥に及ばず。盆に栽たるは干鰛を用てよし。又葉頗小して花紅色を帯るものを紅かうほ稀といふ。又細葉のものあり。又ひ花川骨は苗小く葉の形馬蹄に似て園し。花は皆同し

澤瀉 本草　和名さじおもたると云。澤稀のものは葉園し。慈姑は挿ると同し。池沢等に挿ばは肥に及ばず。實を挿るは湿地へ三四月比前生て後泥の中に移べし

兒絲子 本草　和名祢なしかづらといふ。日光足尾。江戸早稲田本所等

稀に在所あり。新木あるとき下に葉ある処に生ずる。初葉に纏後には木の上まで纏。根は指くなし。枯實は採なる。堅貯至三四月後に生し。灌木ありて下に葉ある処へ萌だし。肥を用ず

天門冬 本草　葉は松に似たり。茎にすぐかづらと云。蔓長にして木竹を纏。又特生のものあり苗小し。根母指の如くして長し。湯を通て心と皮を去乾て葉に入。又壓石を自然汁を搾去て。砂糖に漬或蜜に漬てよし。挿るは山畑を深耕て其分挿人糞をそゝぐ九十月に掘採べし

五味子 本草　武蔵。下野。甲斐等の山中にあり。葉は搗て嗅は松の香あるゆへ松ふさ。松ぶどうなどと云。是北五味子にして葉に入よし。

又朝鮮五味子あり。南五味子ハさ称ぐらと云下品にして薬に入ず。
山の佐地に捨べし。蔓太なるハ肥に及ぢず。初ハ酒粕人糞等を用
べし。蔓をたるめて出ぬけ金ハ根を生ず。是を切て分捨べし

金櫻子 本草

葉ハ野薔薇又崖椒に似たり。花五瓣にて淡紅なり。
実ハ指頭の大にして刺多し。漢渡の金櫻子と全同し。二月に月
枝を挿バよく活る。又山椒だらも此類なれども多ハ実を結ぶす備急本草の
金櫻子の圖ハなにハいだらに似たり

牽牛 本草

葉に入ハ黒白の二種を用。李氏本草綱目に丁香茄
苗 秋荒本草 を似たり。白牽牛とするハ誤なるべし。白牽牛ハ常にあさがほの
中にて種の色白もあり。近ハ江戸大坂にて多捨る人種類多く悪

牽に嫌あらず。花の色ハ碧色ハ常品なり。紫淡黄紅。又浅青に紺に
竪筋あるもあり。又白して筒の紅きあり。又花瓣切たるあり又切ずして
縮さるあり。又花切て瓣多ものを乱獅子と名く。又花の筒より細長き
花瓣生る所孔雀と名く。又八重あり。筒を牡ぢるものを菜屋と云。
又葉の形変ものあり。葉小く厚縮たる所宇津川と名く。又葉黄緑
色にして緑斑あるものを松島と名く。又葉細長して柳の如きもの
あり。又絲瓜の葉に似たるもあり。又数多の莖皆寄りて莖扁く
なり。枝なくして花多開もあり。是ハ石下なり。その餘二百餘種あり

烏頭 本草

こまかぶとこも云。大毒あり只入ぢうらず。山に自生ぞるは
毒弦し。又蝦夷附子あり花深碧色なり。又俗に川烏頭と名くるもの

あり葉大なりて掌の如根出して三四寸に至り疣あり。又上総に白花の
そのあり上品なり。此物を多栽て附子を製さべし。根の形圓しく出く
末尖まり。根九十月に掘採ハ一本に三四の子を生ず。製法に念を入
ざし。種る地ハ豊なよし。芋を種るかしこと。如本陰に宜肥地なれハ
肥に及ばん

連翹 本草　冬中根出人糞酒粕等を入とよし。梅雨中に秋き枝を
管に切て少水に浸て挿バよく活その心。むかしに宜し

蔓荊子 本草　相模国海邊に生ず小木なり。葉圓花紫にて小く
実ハ南燭の大さなり。是を葉に用。于翎人糞を冬夏とも用てよし。
二月枝を管に切て挿度々水を灌べし

山梔子 本草　山ちの湿地真土なれバ多き木へ挿べし。人糞を忌。菓
子の用又菓に入る用ゆるなり。三四月枝を挿べし。名花彊云夏
花ある時挿ハ活之

山茱萸 本草　俗にさんしうと云。正二月頃少なる黄色の花攢簇て
圓き形をなす。葉花に用ゆ。漢種ハ官園にあり。紅き実を結形状
胡頽子の如し。六味丸八味丸等の補剤に入小木の時ハ人糞を用て多く
生ずせしむべし。大樹になるまバ肥に及ばず

枹杞 本草　二種あり常に多きハ枸棘にて刺あり。葉に入るハ其の
枹杞を用べし。真のくこハ刺なく実圓して長ゆるず。紅く熟したる時
採て日に乾酒に浸焙細末となし。砂糖を少入朝夕用て志補益す。

老人虚人用てよし。又葉を採蒸貯置葉を多く用べし。枹杞ハ二月根を掘管に切て別に植れバ芽を生ずるゝ。又挿てもよし

木瓜 本草

からぼけハ花紅しさらぼけハ淡紅色なり。緋ぼけハ玄赤し。又白花もあり。正二月接べし。寒中二三度も根ゆへ人糞を灌バ花実多し。又狗の糞を用ると花繞に見へたり

龍舌草 臺湾府志

油葱 嶺南雜記 とも云。其脂液を本草に蘆薈といふ。本暖國の産なり。阿蘭陀にハ種類多し。本邦にハ芙花と法紅花と二種あり。葉ハ蘿蔔の莖の如くして大なり。その形鱟魚乃尾に似たり。夏秋二度花咲とあり。花の莖三四尺あり根より生る小科を分植べし。夏中人糞魚洗汁などを多く澆てよし。其盆

栽なれバ去乾たる時澆べし。湿なれバ腐易し十月中旬より庫むろへ入清明ゑに出してよし

桑 本草

葉の圓き形白桑といふ。又葉圓して大さ一尺ばかりなるものあり是ハ江戸に稀なり。又葉に花叉ありて構の葉に似たる形雑桑と云。此種に基ゑて細して葉も細く糸の如く。又一枝の内に圓き葉を生ずるとあり。是を女桑といふ。是ハ蚕を飼に無し。然て柄の圓へ植肥を用ゑ。冬根を掘採て葉に入桑白皮と云。正二月枝を挿てよく活れなり。或ハ云桑木を屋材とすべからず

桐 本草

きりの実ハ圓へ荷てハ大へ延し。冬の日あたりの所おぢりにて乾めなる如く。秋実を多く蚕に荷。上へ瓦をかせ置。三四月に瓦を

それバ生ぎどうたり。生長して後分植とよし。又三月枝を管に切て挿。
打て水氣灌バよく活るものなり。又梧桐ハ実氣植とよく生ず

松 本草

雄松ハ山出又ハ出にもよし。雌松ハ赤松とも云。山出よし。
湿地にハ宜うらず。植梨ハ正二月より。三月より接にすべし。然て松類は
陽地の乾めなる地へ植。糞洗汁分類の汁等氣灌てよし。又油糟人
糞などにて肥出氣植へ植るもよし。人糞ならバ虫氣生し。糞拈
落るなり。天目松の仕ことハ志むづかしれ其れなり。大概ハ実生の二年ゆ
くらいなるを以て。根もとより竹へ生付て。蕨縄にて志かと止む。竹を
地へさし込て。松に肥を澆バ屈曲たるまゝにて太なり。古木の姿となる。
扨又枝へ竹氣添又ハ銅線などを添。蕨縄のあつしにて枝氣生。

扭ながら曲るなり。松に限ず然て木氣捻にハ枝氣扭ば出ずなれバ
打るもなり。花鏡云。宜穴幹納巴豆則。枝節柔軟可結農桑要
訣。松の新枝を切て打るなり

箭竹 本草

世云山出によし。其湿地に植るにハ根もと氣立てすべし。
其出乾ことなれ。人尿又獣肉等腐して入べし。油粕を入もよし。
然て竹類葉を煩さるとも叔糠ハ却てよし。植智ハ五月十三
日に植べし

草綿 本草

野菜に宜うらぬ圃にて。其出にぶやすを雑りたる地に
よし。種氣前にハ四月頃実氣出の上に垂。腐たる人糞氣入て
踏てうれよせ。其種をうへ生て後于鰛油糟を用てよし

燈心草 本草

池澤の至に植或ハ田に植るなり。此草ハ瓤をとて燒に入蠟燭の如に入。又茎に用。此草にて席を織ことを近江席と云。此藝に細して縦その外あひげと云。是にて織る席外備後席といふ。縦ゆへ中にて継なり。皆肥ハ雞屎を身一とし。又茎をとり于緼等を用てよし

藍 本草

蓼藍菘藍の二種あり。本邦にて用るものハ蓼藍之。是に又二種あり。形紫蓼に似て圓し。又長さあるなり。とそに形ハ又ちがひにより。其分ハ種外荷于翻人糞等を用てよし。夏なり秋ゆるぐ。一毒。二毒。三ぢんと三度刈なり。採て乾。砂泥の中へ鍋釜深おに用ゆ

紅藍花 本草

秋分に実外荷灰汁人糞汁等外荷て澆てよし。真ハよし。多外經て其に至て花あり。中胡に花を摘て去ずりて燕脂を製するなり。故に是をつむ花をといふ

紫草 本草

陸奥南部より出るもの上品なり。根外深その外用とし。月上旬に山畑へ種外荷べし。灰汁于翻等を用てよし。花鏡曰忌人溺及驢馬糞並烟氣能令色黯

匏 本草

手入ハ大抵壺盧に同し

蒲蘆 本草

千なりひようたんハかたち小くして実なし。拘ぬようたんハ柄長してひしやくに似るべし。植ゆうハ壺盧と同し

美花類　四十一種　附リ　葉或実視ベキモノ　十三種

櫻

大和本草に曰。日本に昔ハ梅をもてるといふ。中世より櫻紙花といふ。又漢云にハ櫻なし。朝鮮にハ櫻ありと云々。吉野の櫻は夥ありて山谷に満たり。凡櫻の類を多く挙てかぞへ[illegible]。櫻の類をあつむる事ハ櫻品に詳なり。[illegible]八重櫻の遅を泰山府君といふ。又かを櫻。あさぞ櫻。香櫻もあり。又寒緋櫻ハ花單にて紅く早く開ものなり。彼岸櫻ハ單にて小く早開ものなり。彼岸をぞれいとざくらといふ。花も枝も皆ゆに垂るなり。是に紅きものあり。熊谷櫻ハ八重にて早く開ものも。犬櫻に二種あり一ハ單の櫻に似たり。一ハ樹の形彼岸櫻に似て花は穂紙なし。

うとうぐ櫻に似て花瓣毛の如し。うとうぐ櫻ハ花穂紙なりて花の形都李に似て向く淺紅色実紙結塩に漬て含ふべし。

○[illegible]櫻ハ山の高地にて赤山[illegible]なり地[illegible]櫻ハ常ぎ二月切接にしてよし。八重櫻ハ一重の山櫻の砧へは接ともよし。彼岸櫻又いと櫻の砧へ接がたし。又彼岸櫻彼岸をぞれ[illegible]ハひがん櫻の砧へ接べし。山櫻ハ八重もの砧へハ活がたし。又寒緋櫻ハ八重櫻の砧へ接てよし。[illegible]接時ハ圃(並樹)をうけて。稍を少し出し重。四方紙囲て風雨紙陰重葉の生ずるに絶て去紙去囲をもべし。[illegible]人糞を入てよし。樹[illegible]ハ二月十月より又二三月頃小刀にて樹の皮を引切て重ハ肉紙

樹よく ふとるあり

海紅 本草 漢渡蛮緑海棠八今多。花紅にして垂るゝあり。花色淡きもの八西府海棠なり。枝幹を接べし。よく八枝幹ゝ同じ。多年肥土を用。雲毛もし。冬ごろべし。海紅八春彼岸者に切接ふべきよし。又棠梨あり是八おもなり

木芙蓉 本草 花紅白とも単弁あり。八重なるも共開て三日たゝざるなり。又重弁ゆく一日八白く二日めハ淡紅となり三日めハ紅花となる。是紙漉色芙蓉とも称芙蓉とも称花なり。総じて二月枝ゝ管ゝ切ゆく挿べし。多年花あり五六月多人糞ゝ紙焼べし。お肥地を好むものなり。暖地なれバ十月まで蔓ゆく幹を畏重べし。寒地ハ

堰おげく 根ゝ畏ゝ紙ゝ畏ゝ入重ゝ畏ゝ出ゝく 接べし

扶桑 草 花赤紅あり。老虎黄あり。紅の重弁あり。葉ゝ白斑あり。七八月ゝ枝ゝ小指ゝ管ゝ切ゆく。多ゝ肥ゝ赤ゝ紙ゝ入多挿べし。十月中ゝよろゝ庫ゝ入べし。寒ゝ紙ゝ畏ゝ入ゝ凍ゝ二月ゝ暖ゝ気ゝ出ゝ五六月人糞ゝ水ゝ焼べし

きやう〳〵よ 移植多し。長生花林ゝ小貝ゝ入ゝ多ゝ挿べし。

まつちやまち 寒地多ゝ西ゝ二八月ゝ赤ゝ入挿べし。わく米泔水ゝ紙ゝ灌ゝよし

躑躅 本草 移植多し。ゆく ゝ ゝ木ゝ枝ゝ葉ゝ根ゝよし。木ゝ枝ゝ葉ゝ根ゝ挿ゝ入ゝ多ゝ挿べし。多ゝ八ゝ紙ゝ撮て縄ゝ水ゝ苔雪ゝ防べし。地ゝ西ゝ多ゝ八肥ゝ水ゝ及ゞ

頼桐 木草綱目 海桐集解 葉ゝ根ゝ水ゝ紙ゝ圓く花小して赤し。ゝ木大毒

あり。頼桐の葉を包たる食物を喰て死せしを見あり。四月枝を管に切て赤土又ハ云葉に挿てよく活ものゝ。夏中人糞汁薄泥等を澆ハ花多し。然ども毒ありて無意の木なり多栽だからずと

茉莉 本草

本除隙より来る。薩摩にてまふまんくるといふ。今江戸にも多種。花の香気を以て。夏中人糞汁を澆てよし。按雨中又ハ八九月雨降来る枝を挿ハ活ものゝ。十月中頃より庵むろへ入べし。

玄宝氣を以て忌るゝを見るなり

山茶 本草

種類多し。地錦抄云。植人ハ五月中旬。接木さし木も五六月。よび接ハ常なり。さし接ハ枝を長く切て挿て接。其接ハ枝をきつと切口を水につけて其人を接。三月に一度ゆゑ枝を入智。接枝ハ

砧を引切て鋸目を削。蔬菜二三服吞ほど其ある枝を重て接べし。引切て其ある接ハ切口より水出て傷となる。扨削枝ハ常のごとく肉皮だらりなり。麻糸の湯づきたるにてよく枝に巻。上に籜をかふせて重べし。熱て山茶ハ枝を悉切て挿てるよし。枝のよきハ枯る。挿條ハ切口を二つに割て挿べし。割たる処より枝出る。むかしに二周程ありて接なりと云々。肥ハ各中人糞を枝に入澆べし。或云山茶屋中枝となるべからず。夢魂驚動ことあらしむ

茶梅 花鏡

赤土黒土等の宜地により。湿地に悪し。植木ハ五月より。接木ハ又山茶の砧にしてもよし。接木挿木ともに五六月より。および接さし接にして接し。各中枝に人糞屎等を入るよし

美人蕉 本草

本暖地の産也。其ハ芭蕉に似て狹し。夏秋の間花を開赤花と朱花如し。夏中人糞紙澆十月中に掘て根紙包唐むろへ入べし。三月出して挿るなり

山丹花 漳州府志

又紅繡毬 同上 とも云。本暖國の産也。今薩摩より来り多栽。其ハ冬青に似て如し圓く。花ハ七月に開紅と朱の如し。八月枝紙赤ゑ挿べし。其の内ハ人糞紙澆てよし。十月中により唐むろへ入べし。志宇氣を怒るを忘るなり

玫瑰 花鏡

和名ちまるすといふ陸奥海岳に多し。花ハ紅白乃二品あり。実圓して赤く玉のごとし。冬夏の間魚洗汁をそゝぎてよし。根紙切分て挿べし

だら

月季花ハ四季花あり。ちよう志ゆんの綬を右京だらと云。又薔薇ハ花単にて小く香氣あり茶に用。又重瓣にして紅花なるものあり。黄薔薇ハ花黄ばこ紙茶るものも。酴醾ハ形状玫瑰に似て長大なり。花白して千葉なり。又富士山に産ずる。なら稔だらハ。形玫瑰に似て志細く刺多し。花小く淡紅なり。其外だら數多し。何も十二月正月或ハ接雨中に。勢よき枝を三四寸に切て挿バ能活なり。其云又赤ゑもよし。暑寒に人糞を澆べし花鏡曰。太肥則脳生莠虫。以煎銀舗中爐灰撒之則虫自死。夏間有黒翅黄腹小飛虫。名鐫花娘子。以臀入枝椏生子。三五日後出。細青虫而鬱黒者。食葉傷枝

南燭 本草　実に紅きあり白きあり。日陰に植む旭がしあたるはよし。
肥を又黒ぎに植べし。米泔水に灌。根かしを茶滓を無べし。勢よくれば
実に結てもなせず。南天竹人家に植く火災に防と花鏡に見えたり

石楠 本草　日光山中禅寺湖水の傍に。ちさ一丈餘の大樹あり。
又大峯石楠は。葉細長し花は同しかた。又ひめ石楠は。形状小く
葉本のごとし。是は石楠の影に兆。白めなる砂と赤ちとなるに合て
植べし。四月八月に枝へ玉に付て挿バ活なり。人糞によろしからず。
米泔水又油糟にはかしに用てよし

しゝにしだ　按西中に枝に切て赤ちへ挿べし。干鰯人糞を用
てよし。宝鏡に忍るゆへ鳥は喰地に無。又むろへ入べし。挿花に月るへ

紫藤 本草　摂津國野田の藤は長さ四五尺に至る常の藤ふじとは
別なり。又花大にして緩長のあり。又白ふじあり。又古用ふじは葉も
花も小し。三月に接にしてよし。又根に掘採て砧とするもよし。
人糞に酒粕をまぜ根に入べし。夏中細長き蔓を多生ると花
その蔓に刈べし

鉄線蓮 花鏡　山の野ちよう人酒粕人糞に入てよし。枝を付て玉に
至る。根に生じて分植べし。棚を三尺ぐらいに低接てよし。又花白して
手ふるるものを。ゆえおこしといふ。又かざぐるまは碧色にして花大
なり

玉蘂花 花鏡　長崎にて。お詠んかぐらといふ。享保年中漢王より

来ると。地錦抄に見へたり。武物宝を乱れ恐る。庫むろへ入るとよし。八月
頃蔓を切るさし。或ハとりあまして三月に分植てよし。人糞を用べし

礒松　薩摩琉球等の海岸石の中に生ずと。幹に鱗甲ありて蘇
鉄のごとく。細して枝あり。葉ハ瞿麦に似て圓し。秋みのり葉ハいろの
花あり。形状採に似て小し。移植る時ハ枯易し。おれを植るにハ赤
たに白めるる砂を等分に合せ植て。文蛤蛤蜊をお碎中の水を
澆べし。植て尚分ハ清水ハ悪し。よく根活てハ井の水清水等を
そゝぎ。猶ほ澆けるくてもよく藝るべし

水仙　本草　農業全書の植法ハ夏中根の塊を掘出して日に乾。人糞
汁に浸蒸。又採出して日に乾と三度ほどして。暖地に植るといふ。花

鏡の法も是に似たり。水仙ハ安房國に多し。山にて早く花をひらく。
盆に植たるハ花咲がたし。地にうへて七月頃根を掘て。酒粕馬
糞人糞とまぜ合多入てよくたを踏けば。夏中度々水を灌てよし。
花鏡云。七月猪屎和泥種

献歳菊　臺湾府志　又雪蓮　西域聞見録　ともいふ。蝦夷にてハ「シユク」といふ。
山に多くなるず。一尺餘ありて花大なり。又洗黄福寿等あり。茎緑色
たゞ花洗黄なり。又重瓣ふくじゆさうあり。形状八重菊のとし。是ハ
花開と遠し。山の雪に植べし。盆栽ハ花おし。花の時ハ雪を掘て
よし。夏の内米泔水を根に灌おし油糟を用もよし

獐耳細辛　本草　又ともまさうとも沙たりさうともいふ。加賀國白

山に多あり。白花のゆれ多し。又淡紅あり。又薄紫もあり。深碧色深紅色のゆれ稀なり。夏ハ日陰にて冬ハ日陽よき。山の黒ぶく無去無れ地に植べし。花ハ正月に開く。其後雲除をしてよし。夏中ハ水ぶく米泔水を灌べし。人糞ハ悪し。

風蘭　花鏡

西國に多し。檜柏又加條木などの生樹の枝幹へ着。椶櫚の毛などにて結つけ無ば。皮へ根を纏蘿ものなり。又へごへ蒸て袖生ぶ。名護蘭も同じ。

櫻草

種類甚多し。悉峯に暇あらず。大抵黒ぶく土五升。下谷茶の湯れあげ法ち紙。曝し墾し細に篩たる紙五升。色のみんを入てまぜ合せ。此五へ二月初に根紙分植てよし。一説に馬糞ある紙

澆ば花多しと云。あまり肥ふてゐハ葉大にして花の莖長く且かしらく不稀なり。又ゆきちりさうあり。小ざくらと云。日光山まあり。葉小く花も頗小く淡紅し。又阿蘭陀にハ黄色のさつくさうありといふ。

瞿麥　木草

大和なでしこハ無に生ずど花淡紅し。又薩摩なるのなでしこハ洛陽花といふ。花ゑ大にしてさしはたし。三四寸に立るものあり。花瓣深く切て糸のごとし。花に紅白紫を帯るもの。紅白に綾なる種々あり。実ぶ人にて花変ゆ人一なるす。七月種紙蒔べし。黒ぶくに去去無るに合せ人糞紙澆。夏の内曝無此ある紙まぜて蒔植てよし。植替ハ二八月よし。三四月蘆を深く結立。蒼出たる時枝の蒼を摘去ハ花大く咲ものゝ。又石竹ハ去去に矣洗汁を澆てよし。又冨士

るどしさい。かさゝるでしこハ。まゝなに砂をまぜてよし

石竹 本草　真玄により。江戸にて多作。七月種をまゝ矣洗け。又人糞汁を澆もよし

剪紅紗花 本草　真玄或ハ赤ちに砂まぢりたる作よし。春種ハ荷干縕人糞等澆てよし。舊根ハ年〻植付たるがよし。剪春羅又春せんのふの類皆同し。花鏡云剪春羅宜雞屎

藍菊 花鏡　花碧色紅白るどあり春彼岸に種を荷。秋花咲え。人糞矣腥水等ハ荷して灰〻澆べし。又秋荷て南むろ人入れバ日本に花咲なり

敗醬 本草　山の野に自生ぎ。花の黄なるハ女郎花と云。花の白きを男郎花といふ。植る作ハ黒ぎくよし。ゑハ細なる茨又ハ木の葉ハ落べし。自然に腐て肥となるなり

胡枝子花 救荒本草　月見草 藻塩草　玉見草 堀川院吳名　とも云。孫球にてハまゝ萩と書ると。四季に花咲ハ宮城野といふ。花紅して月をなし。又紅白咲分あり。又木たゞハ幹年〻枯ぎして樹のごとく。たゞさ一丈餘に至るものあり。根分ハ二月十月は。其中人糞を澆てよし

せんだんたゞ　葉ハ三枚ゆきて豆の葉に似たり。花ハ黄色なり。砂まぢりの赤ちよし。馬屎に干鰯をまぜ澆てよし

燕子花 漳州府志　藏玉集に良吉菊といへり。かきつばた花杜若と書ハ誤なり。杜若ハ高良薑の一類にして少し低く。花白くして

黄蘂あり。是を福建高良薑とよし。又花戸にて縮砂といふ。此もの縮砂又山薑などの属に非ず是杜若なり。扨蘂子花ハ四七十月に花咲を四季ざれと云。又白あり。白くして紫斑あるが鷄の尾と云。紅くそを帯る紫をしよくこうと云。花瓣大よりて云枚あるを云曜といふ。惣て田の傍池などに植てハ肥に及ばぬ所に植べし。然に植てハ干鰛ごまめ等をさし込てよし。又花菖蒲も同じ

蘭蓀 本草

豊ちしとも同じ。黄洗汁を澆バ花多し。多ハ人糞が用てよし。あやめ種類多し。紫ハ常なり。紫と白の絞あり。又鳶尾もあやめの事入れてよし。又俗に扇菖花。尾張國にてひたかざあやめと名く。葉ハ射干いちはつなどに似て花ハあやめに似たり

蜀葵 本草

種を蒔て花の色変ゆへ種とあり。白花淡紅深紅などあり。近花亦て紅く黒く見ゆるもあり。黒あふひと云。惣て七八月種をまれ。急洗汁人糞汁澆の外など澆てよし

蘭蕉 農圃六書

多中圃へ人糞を入曝し墾金。四月種を蒔べし。多ハ根口へ葉を蒔て日を防べし。赤花のもあり黄花のものあり

紫羅蘭花 花鏡

赤土或ハ云の肥地へ秋の彼岸に種をまれ灰人糞并屎などを澆てよし。素植蒔べし

日々草

本西ちより来り今多し。三四月種が蒔人糞が多澆べし。此を多に亦て庚むろへ入金バ枯ぜして小木のごとくになり。素に亦て花を開く。花に紅白の二種あり

金盞花 本草　秋の彼岸に種を蒔。其去或赤土にもよし。美洗汁人屎などを澆べし

千日紅 花鏡　天和貞享年中に本邦へ初て渡と云。今甚多し。真土赤土ともによし。二三月種を蒔秋花あり。紅白二種あり。美洗汁人屎等澆てよし

幽蘭 本草　秋蘭 事物紺珠 なり秋花あり。又葉に斑あるものを地軸。又さんまんなどいふ。又對馬國に產する。青幹蘭紫幹蘭 廣東新語 等あり。俗に寒蘭といふ冬花あり。又漢なり素真蘭と稱して舶來あり。其葉小蘭に似て花の形建蘭のごとく色純白にして背綠色紙帶。其香又愛すべし蘭中の奇品なり。又漳蘭は葉

縮し。小蘭は葉縮く挺し。花の香氣志勝たり。又なぎ蘭は土佐國紀伊國等に產ず。葉の幅七八分長さ三百寸にして。形狀竹栢の葉のごとく花は蘭に似て小し。又琉球より來る鳳蘭 五雜俎 あり俗に菖蒲蘭といふ。葉は建蘭に似て小し軟く長さ二三尺十月花あり。又不山中に生ずる報春先 花鏡 あり。葉は小蘭に似て濶く其花を岡ゆへ春蘭 蘭譜 と名く。其外蘭の數多し。又蘭の數に非しく蘭の名あるも此志多し。想て蘭を植る法品とあり。大凡赤土に油糟干鰛を少入植てよし。花壇綱目に田螺生にて殼ともに碎。大豆煮汁を等分に合四分程。腐る時殼を去てまぜ植べし。悪ばくは悪し。又赤土に白めなる砂を多入まぜ合るなに植てよし。

屎鬱ハ悪し。風呂の水ハ折々灌てよし。蘭ハ井水を忌み群芳譜に見ゆ。常に日陰に無べし。八月挿なくよし。盆の底にむかりの山の黄石を粗碎て入ハ。水よく枝るものゝ。然ども霖雨のせ川ハ内へ入べし。水ハ去夏入るゝ。花鏡曰。養蘭訣云。春不出。夏不日。秋不乾。冬不溼。

一舩蜞 本草小識

葉に狹と濶と二種あり。葉のせばきハよく立ものなり。又星あるもあり。葉の濶ハ葉の先垂るものなり。是に同道ある水あふと云。是ハあまり肥るれバ斑返るものゝ。肥をおゝ用てゝ入をよくとべし。盆に挿れハ斑へらず。春根の本に苑を開。秋実ハ結て形柚のごとく中に実あり。玉蜀黍の種に似たり。春に挿れバよく生ず。

根分八九月よし。地ハ黒ぶく壁ハ悪し。下谷蓋のなよし。又赤なり漢の揚なを切まぜ挿てよし。肥ハ水の事根もと人糞ある糞を入てよし。又折々油糟を解て澆べし。又月代の毛を垂てよし。日陰に挿日陽なれバ蘆簀を覆ふ事保を接てよし。其入なれバ此さ如人に至るなり

万年青 花鏡

種数多し。長崎雪山大名曙鍬形等数多し。又なんきんおもとハ幅三四分長さ三寸ばかり花実なし。然て挿る地ハ赤ちに砂をまぜて挿。油糟漬の水米泔水等澆てよし。陰地に挿べし。或ハ云おもとハ毒あり。然ども多し実ハ食を見れハ極みの毒もあるまじ。漢土にてハ万事の祝儀とに万年青を用ること。

本邦にて松竹を用ゐるがごとし。花鏡云萬年青一名藍。呉中人家多種之。以其盛衰。占休咎造屋移居行聘治曠。小兒初生一切喜事。無不用之。以為祥瑞口號。至於結姻幣聘。雖不取生者。亦必剪造綾絹肖其形。以代之。又與吉祥草葱松四品。並列盆中。亦俗套也。

松葉蘭　中山傳信録の。松蘭竹蘭の類なるべし。九品伊豆安房等の高山岩石の間にはすず。石を割て是を採る。掘る盆の如板の穴を大くあけ。陶器の窰を伏ゐごを刻て入。或は椶櫚の毛を入。そこへ山の黄土の塊を入て。山の樹の根などを掘る赤ちへ。ほどを粗く刻てまぜ種とよし。常に水陰に蚕水風をよく出し。おくに

米泔水を澆べし。霖雨の節は内へ入べし。あらはし蓋へ入るなり

とにしだ　清俗に。海蝦青と云。未是非を詳にせず。二種あり。雄しだは葉厚しと雖し。雌しだは葉長し。忍びくちの陰地に栽おく米泔水を灌てよし。然てそこの類は葉の背褐色になり。或星をはず。此そこの実なり。此葉を採採て陰地のこけむしたる所へ振て蚕がよく生るものなり

百両金　本草　からたちだるといふ。種類を多くして悉挙にいとまあらざと。実に。赤白淡紅黄紫等あり。葉に多羅葉鳳凰縮緬繻子竹葉櫛葉鶴ヶ岡等あり。又斑入に種々あり。又別に木さちだると云あり。高さは丈尺にして枝多し。葉は血櫛に似て厚く

大なり。花実ともに硃砂根に似て大なり。熟てたちだるを取を
捺るに赤めなる山出よし。黒ずくまたるは悪し。草木などを
多生ざる肥たる赤出を採よく篩て用べし。肥に及ぼす。捺付て後
風呂の水を灌べし。油糟ハ少し用てもよし。金に捺るに、細底の水枝
の穴をたくあけ。陶器の鍋を伏て所々に透りあるがよし。扨その
上へ山の下にある。黄土の塊を粗砕て底へ入。たちだるを鍋へ入口より
さらくと。土をあしらて入。最後左右へ鍋を動ハ根の多くへ出よく行
渡る。熟てたちだる水垂水ハ南に垂木などある陰地よし。上へ
蘆簾を覆ひ水ハ生て露を受べし。又西戸を覆て雨にあてぎ。
無ども大まくハ小雨にかしあてたるもよし。あまり湿るとそれハ

根腐る。晴たる日ハ毎夜雨戸を明て露を受さしべし。夏中ハ
二日三日めくらいに。葉の面背ともに刷毛筆の類にて水を付洗べし。
別て葉背ハよく洗べし。洗ざれバ出出を生じて葉落る也。熟て
実を捺るに三月に採て出に金の中へ蔚る。右に捺て実此
金の見ゆるくらいに蔚べし。実生親木ともに三日月に捺るべし。
出ずとり取る時ハ肥て勢よし。接に口月芽を生じたる時よび生ぎ。
又身接にしてよし。たゞ花ハ花の根ゆとへ接る。鍋を伏て覆蓋
風にあらべからず。よく活る水考て陰所へ出置し

硃砂根　本草

種々あり。手入ハ大抵百両金に同じ。但し肥土を
捺るにへ少し加えよし。打て面にあてるも苦からず。あさひに少し

あてたるがよし。冬ハ土蔵へ入るなり

紫金牛 本草

種類多し。是ぞく冊子等の竹林の下に植れバよく藜茂なり。殊に栽るにハ秋をよくして夏除の下陰地に悪し。米泔水又油糟などかし澆てよし

火蕉 物理小識

後河安房等の暖地にてハ実を結ぶ実を本草に無漏子といふ。樹又なるもの丈餘に至るもあり。又根の傍ゟ出より生ずる。小科を採植る成殊殊姑米島。白ごけなどといふ。細して枝多し。俗に蘇鉄ハ鉄を好と云て。釘などを打ハ却て悪し。実ハ鉄を好にあらず火を好なり。鉄ハ火気を含ている故也。植る地ハ土ゟ水を生ずるよし。盆栽などハ赤土と砂等分に合

植し。是ぞくハ悪し。冬ハ油糟夏ハ魚洗汁人糞汁を薄くしてく根もと入てよし。陽地にて乾を好湿地を嫌ものなり

海州骨碎補 證類本草

日光山又木曽山中に多し。植る時葉を剪根成大樹の根もと に植れバ木の皮並に地成這ものなり。又へぶん付てもよし。又けどうしを鹿角菜にて炼。意に任て形をこしらへ乾蚕石菖又しのぶなどに成生ぜけ。細き割竹又銅線などにて止。交これ成澆バ葉成生ずるなり

仙人掌 嶺南雜記

又覇王樹ともいふ。本暖國より来る駿河安房等にハ大樹あるとく花成開実を結。花ハ老虎茅にして形黄薔薇のごとし。実ハ母指の大にして中に仁あり。前をよく生ず。又

枝を折て折口へ灰を付かし日に乾て挿れバよく活ものなり。夏中人糞汁を澆べし。迫に白斑あるものあり。又石下さぶてんと云あり。扁して枝かくを形状扇を知らくがとし。或云さぶてんの汁目に入る時ハ盲といふ

龍骨木　桂海草　木志　鎮火樹ともいふ。暖國にてハ多聚挿て籓籬となす。此樹火を防又盜を防といふ。夏乾たる時人糞を澆。十月中により厚むろへ入べし。夏の内枝を切て挿バよく活ものゝ

紅葉　藏玉集に。色見草といふ。紅葉數を多二百餘に有り。山紅葉を挿て夏の頃根口を少掘て。根先を切ときハ。秋に至てよく深るものなり。惣て紅葉數ハ五月に山もみじの砧へよび接にして

よく活ものなり。切接ハきらせて活ぎ。又槭樹の數人ハ活がたし。肥に及ぜば

槭樹　救荒　本草　構かへぐ。你山へぐ。常盤かへぐ。たゞそのかへで生る種數多し。三月五月によび接にさるゝ。砧ハかへで數に接べし。紅葉ハ接がたし。紅葉とかえぐとハ自別種なり。又葉小して三ツの尖ある。唐楓と云ハ誤なり。楓樹ハ和産なく漢土より渡る。其ハなあり種をなして下に垂。花と實と別のものなれど。秋に至て實の大さ母指の如にして圓く。形状栗の毬に似て小く軟刺あり。おれ楓毬なり。府種とせばに。根を砧にして接べし。葉ハ掌の大にして三ツの尖あり。秋よく紅葉ゆへ詩に丹楓といふ

以上百八十五品。各手入の時節ハ國の寒暖によりて小異あるべし。かねてしらず此法に極べからず。此書に洩たるものハ右の品乃内にて。其物の性を考その類を察して是と合かんが。此書に載る果物において。よく鍛煉せば自然に諸の草木の手入ハ。如の僅に自由なるべし。功を積て其理を自得すべし。故に其一種に貫通するとハ。老農に如ざるなり

草木育種巻之下終

文化十五戊寅正月

京都書林　京堀川通佛光寺下ル　植村藤右衛門

大坂書林　心齋橋南久宝寺町　泉本八兵衛

江戸書林　日本橋通壹町目　須原屋茂兵衛

同貳町目　山城屋佐兵衛

